

唐詩の微韻について

九州大学 静永 健

①『広韻』上平声 8 微韻 (周祖謨校正・張氏澤存堂刊本による) p.63~66

* 刊刻文字数一四〇、周氏追補三字、重複字四字……合計一三九文字

小韻十五……【無非切】微・薇／【許歸切】揮・輝・徽・禕／【兩非切】幃・韋・圍・違／
 【芳非切】霏・妃・菲／【甫微切】飛・扉・緋・非／【符非切】肥・淝・裴／
 【於非切】威／【渠希切】祈・頤・畿・崎／【居依切】機・磯・饑・幾／【香衣切】希・
 稀／【於希切】依・衣／【魚衣切】沂／【語韋切】巍／【舉韋切】歸／【丘韋切】藹

cf. 現代語……wei 微・韋 hui 揮・肥 qi 祈・幾 xi 希・yi 衣・gui 歸

②微韻の名作 (その1)

送綦毋潛落第還鄉 (一作送別) 王維 (七〇一〜七六一)

聖代無隱者 英靈盡來歸 聖代に隱者無し、英靈ことごとく来歸す。

遂令東山客 不得顧采薇 遂に東山の客をして、采薇を顧みるを得ざらしむ。

既至金門遠 孰云吾道非 既に金門の遠きに至り、孰か吾が道の非なるを云はん。

江淮度寒食 京洛縫春衣 江淮に寒食を度りしが、京洛に春衣を縫へり。

置酒長安道 同心與我違 置酒す 長安の道、同心 我と違へり。

行當浮桂棹 未幾拂荊扉 行きて當に桂棹を浮かぶげきも、未だ幾ならずして荊扉を払ふ。

遠樹帶行客 孤城當落暉 遠樹 行客に帯び、孤城 落暉に当たる。

吾謀適不用 勿謂知音稀 吾が謀 適ま用ゐられず、知音稀なると謂ふなかれ。

* 殷璠『河岳英靈集』卷上、『文苑英華』卷二六八等所収の詩題 Ⅱ 「送綦毋潛落第還鄉」

宋本『王右丞集』等、宋明の別集所収の詩題 Ⅱ 「送別」

綦毋潛の進士及第 Ⅱ 開元十四年 (七二六)。

③「微韻」の詩の主なテーマと韻字? 『沈佺期・宋之間集校注』(陶敏・易淑谿校注、中華書局、二〇〇一年)

沈 「和中書侍郎楊再思春夜宿直」 微・稀・闐・飛

「酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈」 闐・衣・微・歸・飛・輝

「天官崔侍郎夫人盧氏挽歌」 違・飛・微・輝

「寄北使并序」 闐・衣・飛・微・威・輝・歸・菲・機・非

「喜赦」 歸・輝・衣・飛

「和戸部岑尚書參迹樞揆」 機・輝・歸・衣・稀・微・菲・闐・飛・揮

「龍池篇」 飛・違・微・輝・歸

「關山月」 暉・圍・微・歸

「雜詩四首」其二 機・飛・微・衣

「送洛州蕭司兵謁兄還赴洛城禮」 輝・歸・飛・衣・菲

「李舍人園送龐邵」 輝・畿・駢・微・威

「七夕」 稀・飛・歸・衣・輝

「仙萼池亭侍宴王應制」 微・稀・飛・薇・衣・闐

「哭道士劉無得」
「送盧管記先客北伐」
「春雨應制」(逸句)

祈・菲・飛・晞・飛・衣・微・幾
飛・圍・輝・微・稀・威・衣
歸・飛

「七引八首」其五

韋・(脂?)・歸・飛(部分)

「奉和春初幸太平公主南莊應制」

歸・微・機・飛・輝
↑一說に蘇頲詩

「逸句」(『錦繡萬花谷』所收)

宋

「軍中人日登高贈房明府」

衣・歸・菲(部分)

「奉和梁王宴龍泓應教得微字」

微・衣・飛・歸

「崧山頌」

飛・衣・微・威

「送司馬道士遊天台」

違・飛・歸

「放白鷗篇」

違・衣・飛(部分)

「明河篇」

歸・衣・飛(部分)

「花燭行」

依・微・飛(部分)

「至端州驛見杜五審言沈三侓期閣五朝隱王二無競題壁慨然成詠」

飛・稀・歸(部分)

「則天挽歌」(逸句一聯)

歸

「梁宣王挽詞三首」其三

違・衣・飛・歸

「故趙王屬贈黃門侍郎上官公挽詞二首」其二

機・闈・衣・飛

「奉和幸大薦福寺應制 寺即中宗舊宅」

輝・歸・扉・闈・飛・衣

「送李侍郎」

闈・衣・畿・飛・歸

「桂州三月三日」

輝・微・歸(部分)

「廣州朱長史宅觀妓」

〔疑?〕・輝・妃・飛・微・歸

「早入清遠峽」

沂・微・衣・輝・圍・圻・稀・飛・歸・違・菲

「憶雲門」

飛・微

「江行見鸕鷀」

飛・歸・稀・衣

「送武進鄭明府」

違・飛・微・衣

「王子喬」

歸・非・衣(部分)

「春日山家」

歸・扉・微・違

「緱山廟」

飛・歸・稀・微

「送趙司馬赴蜀州」

微・飛・歸・輝

「使過襄陽登鳳林寺閣」

微・違・磯・飛・歸・菲

「嵩山夜還」

微・歸

「太平公主山池賦」

稀・飛・歸・衣(部分)

「駕出長安」

圍・飛・微・輝

↑一說に王昌齡詩

寄北使并序

沈佺期(六五六?~七一六?)

(『沈佺期集』卷二)

長安三年、自考功郎中拜給事中、非才曠任、意多慚沮、嘗覽文章、間有緣情之作。

明年獻春下獄、未及盡此詞、被放南荒、行到安海、五月二十四日遇北使、因寄鄉親。

南省推丹地 東曹拜瑣闈

惠移雙管筆 恩降五時衣

出入宜真選 遭逢每濫飛

器慚公理拙 才謝子雲微

案牘遺常禮 朋僚隔等威

上台行揖讓 中禁動光輝

旭日千門起 初春八舍歸

贈蘭聞宿昔 談樹隱芳菲

何幸鹽梅處 唯憂對問機

省躬知任重 寧止冒榮非

*「長安三年」||七〇三(武則天治世末期)

早入清遠峽（一作下桂江龍目灘） 宋之問（六五六？～七一二）（『宋之問集』卷三）
傳聞峽山好 旭日耀前沂 雨色搖丹嶂 泉聲聒翠微 兩巖天作帶 萬壑樹披衣
秋菊迎霜序 春藤礙日輝 翳潭花似織 緣嶺竹成圍 寂歷環沙浦 蔥蘢轉石圻
露餘江未熱 風落瘴初稀 猿飲排虛上 禽驚掠水飛 榜童夷唱合 樵女越吟歸
良候斯爲美 邊愁自有違 誰言望鄉國 流涕失芳菲 *先天元年（七一二）作。

洪州西山祈雨是日輒應因賦詩言事 張九齡（六七八～七四〇）（『文苑英華』卷一五三）
茲山蘊靈異 走望良有歸 丘禱雖已久 眈心難重違 遲明申藻薦 先夕旅巖扉
獨宿雲峰下 蕭條人吏稀 我來不外適 幽抱自中微 靜入風泉奏 涼生松栝圍
窮年滯遠想 寸晷閱清暉 虛美悵無屬 素情緘所依 詭隨嫌弱操 羈束謝貞肥
義濟亦吾道 誠存爲物祈 靈心倏已應 甘液幸而飛 閉閣且無責 隨車安敢希
多慚德不感 知復是耶非 *開元十八年（七三〇）、洪州刺史在任中の作。
熊飛『張九齡集校注』（中華書局、二〇〇八年）参照。

④杜甫のミカン畑の詩（名作その2）

甘林 杜甫（七一二～七七〇）
舍舟越西岡 入林解我衣 舟を舍（す）てて西岡を越え、林に入りて我が衣を解く。
青芻適馬性 好鳥知人歸 青き芻（くさ）馬性に適し、好き鳥 人の帰るを知りたり。
晨光映遠岫 夕露見日晞 晨光 遠岫に映え、夕露は日を見て晞（かは）けり。
遲暮少寢食 清曠喜荆扉 遲暮（おいて）少寢食少なく、清曠には荆扉を喜ぶ。
經過倦俗態 在野無所違 經過するに俗態に倦み、野に在れば違（たが）ふ所無し。
試問甘藜藿 未肯羨輕肥 試みに藜藿の甘きを問ふも、未だ輕輕肥を羨むを肯んぜず。
喧靜不同科 出處各天機 喧と靜と 科を同じうせず、出處 各おの天機あり。
勿矜朱門是 陋此白屋非 朱門の是なるを矜り、此の白屋の非なるを陋とする勿れ。』
明朝步鄰里 長老可以依 明くる朝 隣りに歩めば、長老 以て依（よ）るべし。
時危賦斂數 脫粟爲爾揮 時危うく 賦斂 数しばなれば、脱粟も爾（そ）の爲に揮へり。
相攜行荳田 秋花靄菲菲 相携へて荳田に行けば、秋花 靄として菲菲たり。
子實不得喫 貨市送王畿 マメの子実は吃するを得ず、市に貨（う）りて王畿に送らん。
盡添軍旅用 迫此公家威 尽く軍旅の用に添ふるは、此の公家の威に迫られしなり。
主人長跪問 戎馬何時稀 主人 長跪して問ふ、「戎馬 何れの時にか稀（や）まん」と。
我哀易悲傷 屈指數賊圍 我哀へて 悲傷し易く、指を屈して賊圍を数ふるのみ。
勸其死王命 慎莫遠奮飛 其の王命に死するを勧めん。慎んで遠く奮飛（逃散）する莫れ。
*大曆二年（七六七）夔州の瀼西での作。
*『杜詩詳注』卷十九。松原番号一一三五。

参考Ⅱ古川末喜「杜甫のミカンの詩とミカン園経営」『佐賀大学文化教養学部研究論文集』第六卷一号、二〇〇一年十二月。のち古川単著『杜甫農業詩研究』八世紀中国における農事と生活の歌』知泉書館、二〇〇八年。

*杜甫には他に「送盧十四弟侍御護韋尚書靈輿歸上都二十韻」（『詳』23）もある。

⑤韓愈の人生訓の詩（名作その3）

山石 韓愈（七六八〜八二四）

山石 犖确行徑微 行経 微（かすか）なり、
黄昏到寺蝙蝠飛 蝙蝠 飛ぶ。
升堂坐階新雨足 堂に上り 階に坐すれば 新雨足（た）り、
芭蕉葉大支子肥 芭蕉は 葉大にして 支子（くちなし） 肥えたり。

僧言古壁佛畫好 僧は言ふ、「古壁の仏画よろし」と、
以火來照所見稀 火を以て來たり照らすも 見るところ稀なり。

鋪床拂席置羹飯 床を鋪き 席を払ひて 羹飯を置く、
疏糲亦足飽我飢 疏糲（そらい）も亦た我が飢（飢餓）えを飽かしむるに足れり。

夜深靜臥百蟲絶 夜深（ふ）けて静かに臥すれば 百虫 絶え、
清月出嶺光入扉 清月 嶺より出でて 光 扉より入る。

天明獨去無道路 天明 ひとり去（ゆ）くに 道路無く、 ▲飢：上平6脂。
出入高下窮煙霏 出入 高下 煙霏を窮む。

山紅澗碧紛爛漫 山の紅（もみぢ）澗の碧（みどり）紛として爛漫たり、
時見松樞皆十圍 時に見ゆる松も樞（くぬぎ）も皆十圍。

當流赤足蹋澗石 流れに当たり 赤足（はだし）もて澗石を踏めば、
水聲激激風吹衣 水聲は激激 風は衣を吹けり。

人生如此自可樂 人生は此くの如し おのづから樂しむべし、
豈必局束爲人轡 豈に必ずしも局束として人のために轡（ほど）されんや。

嗟哉吾黨二三子 ああ！ 吾が党の二三子よ、
安得至老不更歸 いくんぞ老いに至るまで更に歸らざるを得んや。

*貞元十七年（八〇一）七月二十二日、洛北の恵林寺に行った時の作とする。
また或説に嶺南左遷（元和十四年正月、八一九）時の作とする。

送區弘南歸

區弘（おうこう）の南に歸るを送る

韓愈

區或作歐。唐韻、區治子之後、漢王莽傳有中郎區博。弘嘗從愈於江陵。
愈召拜國子博士、又從至京、時歸、以詩送之。 （↑『全唐詩』339の注）

穆昔南征軍不歸 蟲沙猿鶴伏以飛 洵洵洞庭莽翠微 九疑鑿天荒是非

野有象犀水貝璣 分散百寶人士稀 我遷於南日周圍 來見者衆莫依倚

爰有區子熒熒暉 觀以彝訓或從違 我念前人譬葑菲 落以斧引以纏徽

雖有不逮驅駢駢 或採於薄漁於磯 服役不辱言不譏 從我荊州來京畿

離其母妻絕因依 嗟我道不能自肥 子雖勤苦終何希 王都觀闕雙巍巍

騰蹋衆駿事鞍鞿 佩服上色紫與緋 獨子之節可嗟唏 母附書至妻寄衣

開書拆衣淚痕晞 雖不救還情庶幾 朝暮盤羞惻庭闈 幽房無人感伊臧

人生此難餘可祈 子去矣時若發機 蜃沈海底氣昇霏 彩雉野伏朝扇翬

處子窈窕王所妃 苟有令德隱不腓 況今天子鋪德威 蔽能者誅薦受襪

出送撫背我涕揮 行行正直慎脂韋 業成志樹來頤頤 我當爲子言天扉

*元和元年（八〇六）の作とされる（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』、上海古籍）。

柏梁体。